

◆令和8年度 第4回（通算第119回）蔵前ゼミ 印象記（概要版）◆

日時：2026年7月10日（金）

Zoomによる遠隔講義

Explore uncharted waters～未開の海を探検しよう～

藤原 謙（2005 機械宇宙学科，2008 機械宇宙システム MS，2013 UC Berkeley, MBA）

ウミトロン株式会社 代表取締役

（今回は従来の「印象記形式」ではなく、
少し淡白で短い「講演概要」です。）

2026 年度 第 4 回目の蔵前ゼミでは、本学卒業生であり、JAXA（宇宙航空研究開発機構）、大手総合商社を経て、現在水産養殖向け IT スタートアップ「UMITRON（ウミトロン）」を創業・経営する藤原謙氏を講師にお迎えした。

宇宙工学という先端専門分野のエンジニアから、ビジネススクール（UC Berkeley MBA）への留学、総合商社での投資・事業開発経験を経て、一次産業である水産養殖の IT 化へと進出した異色のキャリア軌跡に基づき、高度な専門性を持つ若手が陥りがちな「専門性の罠」の乗り越え方や、未知の領域でイノベーションを起こすための思考法について、お話し頂いた。

講演の骨子

（1）キャリア選択と「専門性の罠」の打破

藤原氏は、本学在学中の超小型衛星開発や JAXA での人工衛星制御系開発の経験に触れつつ、研究者・エンジニアとしての充実の裏で「自らのオリジナリティをどこで発揮すべきか」という葛藤を抱いた。

大きな組織のルールや既存の専門性に安住する「アセット（資産蓄積）型」の思考から脱却し、時代の潮流や課題に柔軟に対応する「フロー型」の視点を持つことの重要性を強調。専門分野と専門分野の「境目」に放置された複雑な社会課題にこそ、自身にしかできない価値創造の好機があることを指摘された。

（2）宇宙工学・IT 技術の社会実装：スマート水産の挑戦

起業の背景として、地球規模の食料問題や水産需要の高まり、高い環境適合性を持つ「水産養殖」の将来性に着目した経緯が語られた。

創業期に愛媛県愛南町の現場に飛び込んだ際のエピソード

ソードを通じて、机上の理論や一方的な技術提供ではなく、現場の生産者と同じ目線に立ち、泥臭く対話を重ねることの大切さが共有された。AI や IoT、衛星リモートセンシングを活用した自動給餌システム等の具体例を挙げながら、現場の最優先課題（エサ代削減や省力化）にダイレクトに応える「技術の社会実装」のリアルなプロセスが示された。

（3）未開の領域（Blue ocean）に挑むマインド セット

未踏の分野で事業を切り拓く際の思考法として、以下のポイントが提示された。

- **Shadow-cost（隠れた損失）の提示：**「それって何の役に立つの？」という問いに対し、提案を導入しないことで社会や顧客が失う損失・リスクを言語化することの重要性。
- **「目標は心で、計画は頭で」：**制約条件にとらわれずにあるべき姿（ビジョン）を強く掲げ、その実現プロセスを論理的に構築する姿勢（リーダーのように考え、マネージャーのように行動する）。
- **はぐれイワシ・クジラの生存戦略：**安全な群れにとどまらず、あえて過酷で誰もやっていない領域へ踏み出すことが、結果として自身を大きく成長させ、新しい生態系（市場）を創り出すことにつながるという示唆。

当日は、将来の進路や研究の社会実装に悩む大学院生（M1）を中心に活発な質疑応答が行われた。「専門知識を深めることだけに満足せず、社会の現場と対話することの重要性」などは、学生たちが今後の研究生生活や就職、博士課程進学、さらには起業といった選択肢を前向きに捉える上で、参考になったに違いない。

東京工業大学（現東京科学大学）名誉教授 広瀬茂久
Editorial Support: Prof. Gemini